



安全・安心をお届けします。

令和8年2月10日

グリーンプロジェクト情報 第1号

きらきら Eyeランド

JA庄内みどり

発行：庄内みどり農業協同組合
協力：酒田農業技術普及課

作業前にはイチバンで消毒！！ ばか苗対策の徹底と作業計画の確認を！

令和8年産米の安定生産に向けた第一歩は健苗育成です。近年、育苗期間の高温により、葉齢の進みが早くなっています。初期生育確保のため 2.2~2.3葉で適期に移植 できるよう、田植えから逆算し作業計画を立てましょう。

近年、夏の高温（猛暑）や、大雨・少照などの気象変動、またフェーン現象による生育後半の稲の活力低下がみられます。継続的な土づくりで地力の維持・向上に努め、健苗育成で気象変動に負けない稲づくりを実施しましょう。

令和8年度 水稲育苗作業計画

作業名	作業月日
塩水選	3月26日(木)~28日(土)
種子消毒	3月29日(日)~31日(火)
浸種	3月31日(火)頃~ (4月16日頃播種の場合) ※2週間程度までとし、必要以上に長くしない。
催芽	4月13日(月)~
播種	平坦4月16日(木)~20日(月), 中山間4月19日(日)~25日(土)
田植	平坦5月8日(金)~, 中山間5月15日(金)~

春先は作業が集中します。正確に記録するため、農作業野帳への記帳を忘れずに！！

技、其の一 「ばか苗病」対策のポイント！（共通事項）

■ばか苗病菌の増殖温度

- ・増殖させないためには温度管理が重要（温度計を必ず設置する）
- ・増殖最適温度は26℃前後であることから、26℃に近付けない温度管理を行う
- ・水温15℃以上の高水温は「ばか苗病菌」が増殖しやすくなる

■周辺環境

- ①作業場所やその周辺に残る 稲わら、籾殻、米ぬか、粉塵等が伝染源となるため十分清掃し、整理整頓する。

- ②作業開始前には種子消毒、浸種、催芽に使用する機器並びに容器等（育苗箱、水槽、催芽機、播種機等）を必ず洗浄し、すべて「イチバン（500~1,000倍液で瞬時浸漬またはジョウロ散布）等」で消毒する。（催芽機を消毒する場合は希釈薬液を循環させる）前年の被覆マルチや有孔ポリは使用しない。

■塩水選・種子の準備

- ①塩水選でより良い種子を！

品種	塩水選の比重	水10ℓ当たりの目安	
		塩(kg)	硫安(kg)
うるち	1.13	2.1	3.0

☆塩水選後は、水道水で良く洗い流しましょう。

☆塩水選後に温湯消毒をする場合は、必ず1時間以内に行いましょう。

- ②異品種の混入に注意して下さい。
※催芽袋の色分けや、名札を付けてハッキリ確認できるようにしましょう。
- ③催芽袋へ詰める際の種子量は5kgとし、催芽袋にゆとりを持たせるようにしましょう。

■浸種・催芽

- ①浸種は、適温管理ができる屋内または日陰で行う。ハウス内での浸種は水温が高くなるので絶対に行わない。また、直射日光による急激な温度上昇を避け、外部からの異物混入を防ぐため容器には必ず蓋(ふた)をする。
- ②浸種桶には必ず温度計を設置し、水温を確認する。
- ③浸種は、水温10~15℃未満を確保できるよう 3月31日頃から開始する。また、水温が低い場合は開始時にお湯を加えて調整する。低水温（5℃以下）は発芽率低下を招き、高水温（15℃以上）は「ばか苗病」の発生リスクを高めます。
- ④浸種期間は積算水温120℃（10℃/日×12日間）までとし、必要以上に長くしない。浸種水量は種子が露出しないよう十分な水量を確保する。消毒方法の異なる種子は同じ容器で浸種・催芽しない。（詳しくは裏面参照）
- ⑤催芽温度は30~32℃とし、温度計で必ず確認する。（催芽温度が26℃に近いと「ばか苗病」の発生を助長させます。）

■育苗管理

- ①育苗施設及び周辺では、稲わら、籾殻を使用しない。
- ②生焼けのくん炭を育苗床土に使用すると「ばか苗病」が発生しやすくなるので、完全に炭化したものを使用する。
- ③育苗期間中の温度は、出芽時（30~32℃）、緑化期（昼：20~25℃、夜：10℃以上）、硬化期（昼：15~20℃、夜：5℃以上）を目安とする。温度が高いと「ばか苗病」の発生が多くなるので、温度管理を徹底する（「ばか苗病」の増殖最適温度は26℃前後）。温度計を設置しましょう！！！！

技、其の二 薬剤使用の注意事項！

■イチバンの残液処理方法

残液1000当たり消石灰約3kgを投入した後、数日間直射日光にさらして有効成分を分解させ、流出等の心配のない場所で安全に処理してください。**魚毒性が強いため、廃液が河川・用水路等に入らないよう十分注意してください。**

■テクリードCフロアブルの使用法

※スポルタック乳剤は耐性のある「ばか苗病菌」が確認されています。テクリードCフロアブルを使用しましょう。

- ①水温は10℃以上～15℃未満を厳守する。(10℃未満の極端な低水温での浸種は催芽や出芽の遅延、抑制が起きる場合があるので、お湯を加えるなどして水温を確保しましょう。)
- ②消毒作業を行う場合は、太陽光が直射する場所では薬液の温度が上がったり、薬剤成分が分解したりするため、屋内または日陰で行い、容器には必ず蓋(ふた)をする。
- ③薬液量は、種子乾粒重の2倍以上を準備し、「よくかき混ぜる」こと。(乾粒10kgの場合、20ℓ以上の薬液が必要。)
- ④薬液の倍率は、水100ℓに対し薬剤500mlの200倍を厳守し、24時間浸漬する。(乾粒50kg分)
- ⑤薬液に浸漬する際は、各々催芽袋の中まで薬液が染み渡るように、4～5回以上ゆすって気泡を除いてから容器に沈め、24時間浸漬する。(催芽袋内の気泡がなくなるようにしっかりとゆすりませう。)
- ⑥消毒終了後はすぐに浸種を行なう。
- ⑦浸種は、種粒の4倍の水道水(10kgあたり40ℓ)に静かに浸す。薬剤効果を安定させるために、浸種開始3日間は水の交換をしない。その後は3日に1回程度交換する。また、薬剤が流亡しないように、水交換は静かに行う。
- ⑧浸種期間中は、循環式催芽機やエアレーション付きの水槽などを使用すると、黒色の粘性物が発生する場合があるので使用しない(水を動かさない)。
- ⑨「催芽」は、催芽機であっても過信せず必ず温度計を設置し確認する。

【薬剤消毒・温湯消毒共通事項】

消毒前の種子を置いていた場所には、汚染を防ぐため消毒後の種子を置かない。薬剤消毒と温湯消毒を併用する場合、「浸種・催芽・播種」は種子を別々に取り扱う。

技、其の三 温湯消毒種子の取扱方法！

- ①温湯消毒後は直ちに水道水に浸種する。すぐに浸種できない場合は、再感染防止のため、冷却し脱水後、通風乾燥で粒水分を15%まで低下させておく。その後、播種日から逆算し適切な時期に浸種を開始する。
 - ②浸種は、種子乾粒重の3倍以上の水道水(10kgあたり30ℓ以上)とし、雑菌が増殖しないように、2～3日に1回は水交換する。
 - ③温湯消毒後の種子は無菌状態となっているため、その後の不衛生な管理や温度管理で「ばか苗病菌」が付着しやすいので注意する。
- ※もち米は温湯消毒処理を行うと発芽率が低下することがあるので留意する。

種子と一緒に配布されている『作業チェックリスト』を活用して「ばか苗病」の発生を未然に防ぎましょう！！

技、其の四 気象変動に左右されない土づくりを！

管内つや姫圃場の水田土壌pHは5.51(令和7年:分析数264点の平均)と、測定している圃場の平均値は目標値【pH5.5～6.0】に達していますが、目標に達していない圃場(未測定圃場を含む)が大半です。pHの低下は稲わらの腐熟を遅らせ、**田ワキの原因となり、初期生育確保の妨げ**になります。また近年は高温・猛暑や低温・少照などの極端な天候が常態化しており、特に地力の低い圃場での稲の消耗が激しく秋の凋落や登熟不良が見受けられます。

当JAでは令和7年度から第二次「土づくり支援対策」を行っております。下表の対象資材を活用し、積極的、継続的な土づくりで地力を向上させ、安定多収をめざしましょう。

資材名	施用量(kg/10a)	税込参考価格(円/20kg)	備考
農力アップ	60	1,826	ケイ酸・苦土・微量元素を含有した新総合土づくり肥料
混合りん肥新3号	100	1,496	リン酸・苦土・ケイ酸を含有した総合的な土づくり肥料
てんろ石灰(粗粒)	100	1,023	ケイ酸や微量元素を含む。主にpHの矯正を目的とし効果の持続性が高い
とれ太郎	60	3,267	リン酸・苦土・ケイ酸・石灰を含んだ総合的な土づくり肥料

※春散布の場合は耕起前までに散布しましょう。

★次号の発行は3月10日です！